

私を追い出すのはいいですけど、

この家の薬作ったの全部私ですよ？

登場人物紹介

村長

レイフェルが暮らす
小さな村の長。
彼女をよく助けて
くれる。

ハルバート

アレックスの叔父で、
彼の護衛をしている。
顔がちよっぴり
いかつい。

ティア

薬師を目指している
レイフェルの弟子。
見た目が彼女に
少し似ている。

アレックス

大国、アスクラン王国に
ある薬師協会
「蛇の集い」の一員。
「薬学王子」と呼ばれている。
優れた嗅覚を持ち、毒や
薬のおいを嗅ぎ
分けることが
できる。

アーロン

レオル伯爵。
薬屋のオーナーをしている。
ルージェに夢中になり、
レイフェルに婚約破棄
を告げた。

ルージェ

カラストー家の次女
で、レイフェルの妹。
我儘かつ
好色な性格。

レイフェル

貧乏なカラストー
男爵家の長女。
薬師としての腕が認められ、
アーロンと婚約し、
彼が経営する薬屋の仕事
を毎日頑張っていたが、
一方的に婚約破棄を
告げられて——!?

はじまりの話 婚約破棄の朝

私——レイフェル・カラストーの一日は、夜明け前から始まる。

魔物除けの香水の香りを全身に纏まとわせ、光属性と火属性の魔石ませきで作ったランプを手に屋敷を出る。森に、薬草を摘つみに行くのだ。

実家に住んでいたころは、使用人がついて来てくれたけれど、ここ——レオル伯爵邸で暮らすようになってからは一人だ。

最初のころは、メイドが渋々といった様子で同行していた。

ただ少し経ってから、『レイフェル様のお戯たむれにお付き合あいしている暇ひまはございませんので』と断ことわられてしまった。

お戯たむれとか言いわれてしまうと、結構傷つく。ちゃんと説明したんだけどな。

でも嫌々手伝わせて、雑な仕事をされても困る。だったら私一人で全部済ませたほうが早い。

森へ行くための馬車も出してくれないから、自分の足で向かう。
森は、私たち薬師くすりしが信仰する薬神やくがみ様の棲すみ処かだ。

その薬神様の配下である木の精霊のおかげで、今日もたくさん薬草が生はえている。

私は探し当てた薬草を摘み取った。木の葉にのっている朝露を採取することも忘れない。眠いし、ご飯を食べていないからお腹もぺこぺこだ。朝食の時間に間に合うよう、そろそろ帰らないと。少し休憩してから、私は屋敷に戻る。

そのころには、料理人やメイドたちが起きて仕事を始めていた。

「おはようございます」

挨拶すると、メイドたちにじろりと睨まれる。

「レイフェルお嬢様、またこんなに早くから薬草摘みに出かけられたのですね。はあ……」

「薬草なんていつ摘みに行っても同じなのに……」

「何が『明け方じゃないと良質な薬草が採れませんから』ですか。そのせいで、アーロン様が寂しい思いをされていると知らないのですか？」

ここで彼女たちに言い返せば、何倍にもなって返ってくるから、ぐっと抑える。

メイドたちから嫌味を言われる。朝はいつもこんな感じだ。

だけど、今日はいつもの朝と違った。

朝の挨拶をしに、私の婚約者——アーロン・レオル伯爵様の部屋に行くと、なぜかここにいるはずのないうちの妹が、ソファアの上でふんぞり返っていた。

「ちょっとお姉様、どういうことですか？ アーロン様そちのけで仕事ばかりだなんて。お姉様を婚約者を選んでくれたアーロン様に悪いと思いませんか？」

なんでうちの妹……ルージェがいるの？ しかもこんな朝から。



それにアーロン様に寄り添っているんだけど、そこは私のポジションでは？

私が思わずアーロン様を睨みつけると、彼はふんつと鼻を鳴らして妹の腰に手を回した。

わあ、なにごと。

「……ルージュエには、前々から君のことで相談に乗ってもらっていたんだ」

「相談ですか？」

「婚約者としての君の態度についてだよ。君は朝から晩まで仕事ばかりで、私の相手を全くしてくれないじゃないか。それは世間一般から見ても、明らかにおかしいことなんだよ」

「そ、そうおっしゃいまして……私はただ、アーロン様に任された仕事をしていただけですの
で……」

「あのなあ、レイフェル。君は仕事が遅いんじゃないのか？ そのせいで同衾したことがない。甘いものが大好きな私のために、クッキーの一つも焼いてくれない。そんな女性を婚約者にしてしま
い、私は後悔しているんだ」

同衾できないのは、朝早くから菓草摘みがあるからって最初に言わなかったっけ？ アーロン様
もそれに納得してくれなかったっけ？

それなのに「ずっと不満に思っていました」って顔で私を睨みつけるの？

というより、妹よ。どうしてそんな勝ち誇った顔で私を見ているのだ。

疑問が尽きない私に、アーロン様は言い放った。

「そこで私は決めた。君との婚約を破棄し、君の妹、ルージュエを新たな婚約者にする」と

な、なんだってー！

「わたくしね、お姉様のこと悲しんでいるアーロン様にクッキーを焼いてあげましたの。そして
ら、『私の傷心を癒してくれるのは君じゃない』って言われましてえ……」

ちよっと黙ってて妹よ。あなたの言い分よりも、今はアーロン様だ。

「納得できません！ 私はあなたのために使用人からの陰口にも耐えてきましたし、体調が悪い時
も決して休まなかったのですよ!? なのに……！」

「もっと仕事が早くできて、自身の体調管理もしっかりしている女性だったら、そんな苦勞をする
必要もなかった。それだけの話じゃないか」

「そうですね。お姉様がとろいのが悪いですわ」

二人から攻撃されて頭が痛くなってきた。

すごい。アーロン様に捨てられた怒りや悲しみよりも、呆れが勝っている。

だって新しい婚約者、うちの妹よ？

「……ルージュエに私の仕事を押し付けるおつもりですか？ 妹は薬作りの心得は多少あっても、店
の経営に関しては……」

「そんなもの、これから学ばばいい。私はルージュエに出会ってから気づいたんだ。女性はその者が
持つ技術ではなく、心を見て判断するものだよね」

は……私には仕事が遅いと文句を言うくせに、経営に関してほぼ素人のルージュエにはこれから
学ばばいい、か。

矛盾してない？ 婚約者としての務めを私に果たしてほしかったのなら、もっと早く人を雇って私の負担を減らしてくれればよかったのに。

いっそのこと、アーロン様もはつきり言えばいいのだ。薬作りしか能のない私より、美人で男を喜ばせる技法をたくさん持っているルージェエのほうが気に入っているって。

毎日必死に頑張ってきた私の努力は、暇を持って余した妹が焼いたクッキーに惨敗したというわけだ。

そう考えるとなんだか虚しくなってきた。

「……わかりました。ルージェエ、どうかアーロン様と幸せになつてね」

「はい！ お姉様の分まで、いっっぱいアーロン様を愛してあげますわ。だから心配なさらないで？」

心配しかないな、この馬鹿妹。両親に甘やかされて育った結果がこれだ。

私は溜め息をつき、再びアーロン様に向き合った。

私は、もう彼の婚約者じゃなくなる。けれど、これはアーロン様から一方的に切り出された婚約破棄。

だったら私にも物申したいことがある。

「アーロン様。私との婚約を破棄するのであれば、私がレシピを提供した薬の販売をやめていただきたいのです」

「何を馬鹿なことを言うんだ。あれらは、もううちの薬だぞ。販売を停止したら、客から苦情が来

るに決まっている」

「ですが、私が薬の精製に携わることが、あれらを販売する条件でした。私がこの屋敷から去る以上——」

「いい加減にしろ！」

ぱしんと乾いた音が響く。その直後、右頬に焼けつくような痛みを感じた。

悪鬼のような顔で睨みつけてくるアーロン様を見て、平手で叩かれたのだと悟った。

ピンタを受けたこと、それ自体は構わない。僅かに残っていたアーロン様への愛情も、完膚なきまで粉々に壊してくれたからありがたいだ。

ただ、話し合いの場で暴力を振るうのは最低だ。姉が目の前で殴られたのに、全く心配しようとしてないルージェエにも呆れてしまった。

それどころか……ちよつとルージェエ、にやけそうになるのを我慢してるの、丸わかりなのだけども。せめて演技でもいいから慌てるとかしなさいよ。

私の視線に気づいたのか、ルージェエはハツとしてから、わざとらしく甲高い声を上げた。

「そ、そうですね、お姉様！ 薬の販売をやめるなんて、買いに来てくださるお客様たちに悪いと思いませんか？」

「ルージェエの言う通りだ。どうせ腹いせのつもりで言ったのだから、大事な客を巻き込むなんて……君は本当に愚かしい。ルージェエと血が繋がった姉妹とは思えないほどにな」

「……失礼しました」

憎々しげに言ったアーロン様に一礼してから、部屋を出た。

部屋の中から二人の笑い声が聞こえてきたけれど、気づかない振り。

婚約破棄の話は、あらかじめ使用人たちには伝えられていたのだろう。彼らは私を見てニヤニヤしているけれど、それも知らない振り。

涙が出るのは頬が痛いからだ。元婚約者と妹に心をズタズタにされたからじゃない。

なんとか顔を上げて、私は自室に戻った。

実家に帰るための馬車は出してもらえなかった。

あの、もう婚約者じゃないとはいえ、婚約者の姉なんです。そんな文句を言う気にもなれなくて、結局町まで歩いて、そこで馬車を手配した。

久しぶりに実家に到着。馬車の御者には「ちょっと待っててください」とお願いした。何か嫌な予感がしていたから。

「レイフェル……ルージェとアーロン様から話は聞いているぞ！　なんて恥知らずな娘なんだ、お前は！」

「自分のせいでこんなことになったのに、婚約破棄されたくなくて、薬を売るなって言ったそうじゃないの！　何を考えているの、あなたは！」

待っていたのは、顔を真っ赤にして怒る両親だった。

ああ、やっぱりそんな流れになっていた。

アーロン様とルージェのことだ。うちにも根回ししていると思った。

「お父様、お母様。少しいいから、私の話を聞いてください……」

「黙れ、馬鹿娘！　お前のような器量がない女を見初めてくださったアーロン様を傷つけおつて……！」

「代わりにルージェを選んでくださったからよかったもの……あなたとアーロン様の結婚が駄目になったら、うちへの援助もなくなるところだったのよ!?」

うん、確かにそれは一大事だ。

我が家は、元々没落寸前の貧乏男爵家。

今まで私が薬師として死ぬほど苦勞を重ねてきていた。なんとか薬を売って得た収益で、家を立て直したのだ。

もしそうしていなかったら、この家は間違いなく詰んでいた。

その割には、ルージェもお母様も贅沢三昧。お父様はそれを止めようとしなかった。

それが今は、アーロン様の援助のおかげで結構裕福になっている。

「まったく……このような失態を犯しておきながら、のこのこと帰ってくるとは」

お父様は吐き捨てるようにそう言って、私を睨みつける。

私だつてある程度予想していたとはいえ、帰って来た途端ここまで怒鳴られるとは思っていなかった。

「まあまあ。あなた、落ち着いてちょうだい」

怒り心頭のお父様の腕に自分の腕を絡ませ、お母様が甘ったるい声を出す。ルージェは間違いないお母様似だと、よくわかる光景だ。

「レイフェルは娼館に入ってもお金を稼いで、私たちを養うつもりなのよ」
「いえいえ、妹に婚約者を取られた負け犬として帰って来ただけです!?」

言葉を失っていると、お父様が「そういうことか」と言いたげな顔をしている。

これはまずい。家に入ったら最後、拘束されて身動きが取れない状態で娼館に投げ込まれてしまう。うちの親だったらやりかねない。

「レイフェル、お前は長女として一家を支える義務がある。結婚の話がなかったことになった以上、その役目だけでも果たしてもらおうぞ。……死ぬまでな」

死ぬまでって誰が？ 私が？ お父様とお母様が？

思わず後ずさりしようとするお母様に腕を掴まれた。それもがっしりと。

「この先、あなたのような女を娶ってくれる優しい人なんて、どうせ現れないわ。だったら、そんな貧相な体、いくら汚れたっていいじゃない」

実の母親からの言葉に、ぞわっと寒気がした。

「や、やめてくださいっ！」

私は思わずお母様の手を振りほどく。お母様はびくりした顔で固まっていた。いつも従順な私が反抗したからだろう。……こんなの反抗のうちにも入らないと思っけれど。

だけど、彼女はすぐに怖い顔をして、怒りに任せて叫ぶ。

「レイフェル！ 親に対してなんなの、その態度は！」

「謝れレイフェル！ 今すぐお前を勘当してもいいんだぞ！」

二人の怒号を聞きつけ、使用人たちがエントランスに集まってきた。アーロン様の使用人たちと同じ眼差しで私を見ている。

ああ、もう駄目だ。この家は私の帰る場所じゃなくなってしまった。

「……構いませんよ、勘当してくださいさつても」

「なんだと？ 貴様……何を言っているのかわかってるのか？」

いらだつた表情のお父様が私に尋ねる。お母様は、私に振りほどかれた手を何度も擦っていた。痛くもないくせに。

私は深呼吸してから言い放つ。

「もう私はこの家の娘ではありません」

頑張ることに疲れてしまった。家族やアーロン様のために薬を作って売って、何が残ったんだろうと考えてみる。

何もないよ。

挙句の果てに娼婦になって金を稼げとまで言われてるよ、私。

勘当？ それでこの家族から解放されるなら喜んで受け入れます！

「勘当するというのなら、どうぞご自由に」

「ふ……ふざけるなあっ！ 親を馬鹿にするんじゃない!!」

「ふざけていません」

こんなに怒っているお父様を見るのは初めてだ。あまりの迫力にお母様や使用人も驚いている。今までの私だったら、お父様を怒らせてしまったこと、それに家族を捨てようとしていることに自己嫌悪していただろう。

「ただ今のは、「あ、勘当する気はないんだ」と冷静に分析できる。お父様の言葉は、私が逆らえなくする脅しにすぎないとわかった。

貴族にとつて、一族から勘当されて平民に落とされるのは最も恐ろしいことだ。ずっと上流階級の世界で生きてきたのに、突然外の世界に放り出されて、一人で生きていかなくちやならないから食事、洗濯、掃除をやってくれる使用人はいないし、働いてお金を稼がないといけない。

元貴族の多くは、贅沢ができない暮らしに絶望する。

でも、私はそれでいい。今までと大して変わらない。

これまでと違いがあるとするとするなら、今度からは両親や婚約者のためではなく、私自身のために頑張るってことくらい。

……ま、まあ、もう少し考えてみれば他にも違いはあるだろうし、今以上に苦勞するかもしれないけれど。

「この家を見捨てるつもりか！ そんなことをしてみろ！ 罰が当たるぞ！ それになんの後ろ盾もないお前なんて、すぐに娼婦になるのがオチだ！」

「それか飢え死にして魔物の餌になるだけよ。そんな惨めな死に方をするくらいなら、私たちの世

話を——」

「ではさようなら。お父様、お母様」

お父様とお母様の言葉を遮り、頭を下げて、外へと走り出す。

お母様たちの世話って何？ まわりに見栄を張りたくてたくさん雇った使用人たちに、面倒を見てもらえばいいでしょ？

「お、お前ら、レイフェルを捕まえろ！ あの馬鹿娘を逃がすな！」

焦った様子でお父様が使用人たちに命じる。

私が待機してもらっていた馬車に乗り込むと、みんな「しまった」って顔をしていた。

「ごめんね、待ちません。」

ドタバタした私たちの様子に、御者は目を見開いている。

「うおつ、どうしたんですか、お嬢さん!? なんか追っかけてきますけど!?」

「追われているんです！ 早く行ってください！」

「あ、あいよー！」

色々と察してくれたらしい。御者はすぐに馬を走らせてくれた。

後ろから「待て」だとか「親不孝者」だとか色々聞こえてくる。

うん、絶対に待たないし、私はもうあなたたちの娘じゃありませんから。

思えばろくなものじゃないな、私の人生。

跡継ぎになるべく長男として生まれなければならなかったのに、女に生まれた。しかも容姿も中

の下ほど。

お前は出来損ないの子ども。両親は私に『せめて働いて金を家に納めろ』と言い続けていた。でも、次女のルージェのことは、ひたすら「可愛い子、天使」と愛でていた。

私が薬師として薬を作り、売りに出かけても、ルージェには手伝わせようとしなかった。

『町に行つて、ルージェが暴漢に襲われたらどうするの』と、お母様は言った。私だって女だから、柄がらの悪い客に絡まれたことあるよ。

せめて薬作りくらいは……と思つて、ルージェには本当に簡単なことだけ手伝つてもらつていたけれど、それもやめさせられた。

『薬作りなんて地味な仕事をさせたら、ルージェの可愛さが霞かすんでしまうだろ』とお父様は言った。私の可愛さは霞かすんでもいいの？ まあ、そんなもの最初から持つてないんだけど。

以前は、優しい使用人たちがいた。朝の薬草摘かきみを手伝つたり、私にこつそり焼き菓子を作つてくれたりした。

けれど、『レイフェルを甘やかした』と、その人たちはみんな辞めさせられてしまった。焼き菓子だって、見つければ全部ルージェに食べられた。

それが当たり前だと思つていた。長女に生まれたからには、自分を犠牲にして家族のために働き続けなければいけない。

それが世間一般の常識だと思ひ込んでいた。私がいなくなつたら、この家は滅んでしまう。そうなつたら、家族が食べるものに困る生活を送

ることになる。

だから逃げちゃ駄目って言い聞かせてきた。

そんな私を、伯爵であるアロン様が婚約者に選んだ理由。

それは彼が薬屋のオーナーをしているから。彼はうちの薬の評判がそこそいいと聞きつけて、

私に求婚した。

薬屋のオーナーと薬師の結婚。

しかもアロン様は美形だ。いいことづくめのはずだった。

しかしアロン様の屋敷に住み始めてから、私の生活はさらに過酷になった。

朝早くから薬の材料を集めて、午前中は薬の調査に追われる。

午後も、仕事は山積みだ。店の売上や従業員の給与の計算、それから薬の在庫確認や新薬の開発。

アロン様は本業の領地経営で忙しいから、薬に関する仕事は全て私に任せられた。

そのせいで、アロン様と男女らしいことを全然できずにいたのは本当だった。

さらに、アロン様の使用人たちからの風当たりも強かった。

薬のことばかりで婚約者を放はなつて冷たい女。そんな陰口を叩かれていたと知つた時は、少し

泣いた。

それでも頑張つてこられたのは、アロン様のおかげだった。

一度、婚約者をやめたいと泣いて訴えた。

すると、アロン様は私を強く抱きしめながら、説得してきたのだ。

『——結婚したら薬師を多く雇う。今はその準備をしているんだ。もう少しだけ我慢してくれ』と、その言葉があったから、私は耐え続けることができた。私が使用人にいびられていると知っても、『辛抱しんぼうしてくれないかい？』の一点張りなのは、将来の旦那様としてちよつとどうなの？ と思ひましたけれど、彼が私に構っている暇なんてない。これも幸せになる前の試練だと思つて我慢……と頑張つていただけけれど。全部無駄になつちやつたなあ。



私——アーン・レオルは、屋敷から出て行くレイフェルを窓から見下ろし、ワインを飲んでいた。

馬鹿でブスな女が惨めに逃げていく姿ほど、見ていて楽しいものはないな！

「ん〜！ 甘くて美味しいですわあ。いくらでも食べられちゃいますわ！」

私の隣では、ルージェエが幸せそうに目を細めながら果物のコンポートを食べている。

なんて可愛らしいのだろう！

ずっと眺めていたいな……と思つていると、急に彼女が悲しそうな表情を浮かべた。

「ルージェエ、何かあったのかい？ 傷んだ果物でも入つていたのか？」

「アーン様、わたくし酷い女ですわ……」

ルージェエはそう言つて目を潤ませた。涙で濡れる鳶色の瞳は、まるで宝石のようで……

そ、そんなことを思っている場合じゃない。

もう一度彼女の名前を呼びながら手を握る。すると、彼女はぎゅつと目を閉じて、絞り出すように声を零した。

「わたくしたちに黙つて、お姉様はこんなに美味しいものを毎日食べていたんだなつて思うと、悔しいつて嫉妬しつとしてしまうのです……」

「……ああ、君がそんな醜い心を持つ必要はないよ」

嫉妬心を素直に伝えてくれた、見た目通り純真なルージェエ。彼女の細い体を後ろから抱きしめると、甘くて優しい花の香りがする。

いつも薬草のおいをブンブンさせていたこの子の姉とは大違いだ。

「レイフェルがこれを食べたことは一度もないよ」

「ぐすん……そうなのですか？」

「私は嘘なんてつかないさ」

まあ、レイフェルには嘘をつきまくっていたわけだが。

結婚したら人を雇うなんて、そんな見え透いた嘘をあんな女は本気で信じて、奴隷のように働き続けていた。

この私がレイフェルと結婚するわけじゃないじゃないか！

あんなそばかすだらけで、ガリガリに痩せていて抱き心地が悪い女を妻にしてみる。私の結婚生

活は最悪だ。

レイフェルを婚約者にしたのは、彼女が開発した薬目当てだった。私の店で働くどの薬師よりも優れた薬を作れるからな。彼女の薬は今や一番の売れ筋商品だ。

それ以外はどうでもよかった。

だから薬屋に関する仕事は、全部レイフェルにやらせた。どうして薬師としての腕はいいのに、そんなそばかすだらけのブサイクなんだ！ という軽い嫌がらせだ。

ただ彼女から『限界です』と言われた時は少し焦った。ちょうど人手不足の時期で、彼女にいなくなれば困るのは私だった。

使用人から虐められていると泣き言を言われた時もある。あのころも繁忙期だった。

婚約者をやめるならもう少し後にしろ。私はその本音を隠して、あの臭い体を抱きしめてどうにか引き留めた。よく頑張った私。

そして、レイフェルの薬のおかげで私の店の売上は右肩上がり。そろそろいいだろうとレイフェルとの婚約を破棄して、新しくルージエを迎え入れた。

完璧な作戦だ！

「レイフェルはいくら私がそばにいたいと言っても、聞く耳を持つとうしなかった。こんなふう二人で美味しいデザートや酒をゆつくり楽しむ時間すら作ってくれなかった。はあ……」

「わたくしはずっとアロン様のおそばにいますわ。ですから、そんな悲しい顔をなさらないで？」
「君はとても優しいね、ルージエ。そして何より可愛い」

ルージエは今まで私が出会ってきたどの女性よりも可憐だ。一目見て、絶対にこの子と結婚すると決めた。

一つ問題があるとすれば、ルージエはレイフェルと違って仕事というものを全く知らない。正直に言ってしまうと、頭が悪かった。

ルージエは両親がレイフェルを奴隷のようにこき使うのを見て育ったせいで、自分も姉を虐げているのだと信じて疑わない。それに両親にべたべたに甘やかされ、令嬢としてのマナーも最低限しか教わっていないときた。

本来なら貧乏な生活を強いられるはずなのに、母親に連れられて他の夫人や令嬢たちと、のほほんと茶会しかしていないらしい。

レイフェルには、これから経営を学べばルージエだって問題ないと言ったが、薬の精製も経理の仕事も、彼女は全然できないと思う。

だが、ルージエは私のそばにいてくれるだけでいい。私を癒してくれる。それに仕事なんて、これからたくさん雇う薬師たちに任せればいい。

レイフェルに押し付ける前だって、他の薬師たちにやらせていたのだから。

私は可愛いルージエを見つめながら、これからの明るい未来に想いを馳せた。

第一話 新しい生活

「お嬢ちゃん、手荒れ用の軟膏、一ついただけなにかしら？」

「はい、少々お待ちください！」

アーロン様に婚約破棄されてから、数ヶ月。私はこぢんまりとした建物の中で駆け回っていた。軟膏は銀製の容器に入れて売っている。

軟膏といっても数種類あり、効能もそれぞれ。だから区別できるように、蓋に魔石の欠片を取り付けてある。

手荒れ用には火属性の赤い魔石、虫刺され用には水属性の青い魔石だ。

魔石っていうのは魔力が含まれた鉱石で、それを媒体にすれば、もともと魔力を持っていない人でも魔法を使うことができる。たとえば火属性の魔石なら火を起こしたり、水属性の魔石だったら水を出したり。とっても便利なアイテムで、私たちの暮らしにおいての必需品だ。

まあ、今回はただの飾りとして使っているから、それはそんなに関係ないんだけど。

魔力が抜け切った魔石を金づちでがんがんに叩き、砕いて蓋の飾りつけをしてみたら、結構好評だったんだよね。特に女性のお客様に。

作業は大変だったけれど、苦労した甲斐があった！

「レイフェルさんや、胃薬はどれだい？」

「こちらです。はい、どうぞ」

「ありがとう。この薬を飲むようになってから胃の調子がいいんだ」

「でも、薬ばかりに頼ってはいけませんからね。ちゃんと食事にも気をつけてください」

私が作った薬を飲んでくれるのは嬉しい。だけど薬があるからって無茶をしていたら、治るものも治らない。

私が注意すると、おじいさんは「わかってるよ」と言って笑った。それから私の顔をじつと見ながら言葉を続ける。

「レイフェルさんは変わった薬師だね。普通だったら『薬ばかりに頼るな』だなんて言わないよ。少しでも多く薬を買ってもらったほうがいいんだから」

それはそうだけれど、こんな私にも薬師としてのプライドと良心がある。お金欲しさに本当は飲まなくたっていい薬を飲ませるのは嫌だ。

それに贅沢はできなくても、少しずつお金は貯まっている。

客足が途切れたタイミングで私は一息つくど、ここに来た時のことを思い出した。

今私が暮らしているのは、国境付近にある小さな村。

実家から逃げ出した時、とにかく遠くへ行かなくちゃと思った。すぐ近くの町にいたら、お父様の命を受けた使用人に見つかってしまいうから。

だから馬車を乗り継いで、何日もかけてここまでやって来た。

本当はお隣の国に逃げたいけれど、そのためにはお金だけじゃなくて身分証も必要になる。丸腰で逃げてきた私にはそんなものないし、この村の住人として身分証を新しく発行するには一年在住しなければならぬという条件があった。

一年どうやって生きていこう？ と考えていた時、素敵な情報を聞かされた。なんとこの村、薬師がいらないらしい。

半年前までは薬屋があつたのだけれど、その薬師は全然効かない薬ばかり作っていたせいで、村人たちとトラブル続き。最後には夜逃げしてしまつたそう。

その薬師が作つたという粉薬を見せてもらつてびっくり。

薬草じゃなくて、そこら辺に生えている雑草を材料にしていたみだつた。そりゃ効かないよ。その薬師がいなくなつてから、この村の人たちは時折訪れる旅商人から薬を買つていた。こちらはずっと効き目があるけれど、お値段は高め。しかも買える個数には制限があつて困つていたとか。

ベ……ベストタイミング！

そう思つて近くの森に行つてみると、私が薬作りでよく使う薬草ばかり生えていた。

主がいなくなつた薬屋には薬作りの道具が残されていたから、遠慮なく使わせてもらうことに。こうして私は薬屋の新たな店主となつた。

最初は、開店記念としてもものすごく安く薬を売つた。またヤブ薬師が来たんじゃないかって、ちよつと警戒されていたんだよね。だから信頼を掴んでおきたかつたのもある。

村人たちは疑心暗鬼な様子で私の店を訪れて、薬を買つていったんだけど……

『すごいぞ、この薬！ 咳が治まつた！』

『私が買った薬も……胃腸の調子がよくなつたわ』

『この白いのを塗ると虫刺されが痒くなくなるんだよー！』

『あのお嬢ちゃんの腕は本物だ……！』

今ではみんなに受け入れられ、毎日薬作りに励んでいる。

誰からも文句を言われなくて薬草を採りに行けるし、食べたいものを食べたい分だけ食べられる。私は色んなものを失つてしまつたけれど、代わりに『幸せ』を手に入れることができた。

——私は回想をやめると、ふと思ひ出して店先から引つ込み、キッチン兼調薬スペースに向かう。今日はおやつにタルトを作つてみた。今朝、薬草摘みのついでに、果物や木の実も採つたんだよね。

実家にいたころは、持ち帰らないでこつそり食べていた。ルージュに食べさせろつて取られてしまつたから。

今は誰にも取られる心配がない。家に持ち帰ることもできるし、それを使つてお菓子だつて作れちゃう。

木の実の細かく砕いて生地の中に練り込んで、甘酸っぱい果実は砂糖煮にしてタルトに敷き詰めた。

近所のおばあさんから買った茶葉も、すつきりとした味わいでいい香り。

「ふう……美味しい……」

美味しい紅茶とフルーツタルトでおやつ時間を楽しむ。

急ぐ必要もないから、のんびり食べられる。

その合間に書物に目を通す。その書物は薬草学についてまとめたもので、この店に置きっぱなしだった。例のヤブ薬師の愛読書だったみたいで、色んなページに折り目がついている。

一応知識はあったけれど、それを活かすことはできなかったようだ。

「うーん、この薬草とこの薬草を合わせれば……」

既存の薬の改良だとか、新薬のレシピを思い浮かべながら読み進める。私の知らない薬草も載っていて、頭の中がちやごちやしてきた。一旦本を閉じる。

薬草の世界って広いなあ……

今後のためにもっとレシピを増やさないと。

たとえば薬だけじゃなくて、少ない量でもしつかり栄養がとれるような食べ物とか。あとはのど飴とか……そうだ、化粧品作りにも挑戦してみようかな。上手くいったら私も使えるわけだし。

色々考えていると、店のほうから複数人の叫び声が聞こえてきた。

あれ？ 今は休憩中って札をドアに掛けていたんだけどな。

様子を見に行くと、村長さんや村の偉い人たちが店の中で私を待っていた。

私の姿を見た瞬間、村長さんが駆け寄ってくる。

「す、すまんな、レイフェルさん。ちと火急の件があつてのう」

「何かあったんですか？ 誰か倒れたとか……」

「国境付近で爆発事故があつたのじゃ」

「ええ!？」

予想していたよりも大事件だった。というか、この村から国境って結構近いから、ここに来て被害が出ていないか心配だ。

村長さんは焦った様子で話を続ける。

「火属性の魔石やら火薬やらを積んだ馬車に、発火性の薬草が交じっていたようでのう。何かの拍子にドカーンと……」

「ひえ……」

油の海のご真ん中で火を点けるようなものだ。絶対混ぜるな危険だよ、それは。

そういえばタルトを焼いている最中、一瞬揺れたような。ただの地震かなって思っていたけれど、あれは爆発の衝撃で地面が揺れていたんだ。

「積み荷は隣国への輸出品だったそうじゃ。死者はおらんが、怪我人が大勢出とる」

「救護兵の要請はしていないんでしょうか？」

私が尋ねると、村長さんは俯いてしまった。

「しとるようじゃが、ここまで来るのに相当な時間がかかる。彼らの到着を待っていたら、間に合はんかもしれない。そこで相談なんじゃが……」

「だ、だったら、うちの薬や包帯を持って行きましょう！ 消毒液も昨日大量に作ったばかりなん

です！」

こうしちゃいられない。早く準備しなくては。

「傷薬と鎮痛剤と消毒液と……在庫はちよつと残しておかないと……」

私は夢中で店の薬を掻き集める。

「立派な薬師様じゃのう……」

そう言つて村長さんが泣いていることに、私は気づかなかつた。

馬車なんて待つていられない。私は来ていた村の人に店番を頼むと、手当ての道具が入った鞆かばんを持って村を出発した。

重い！ 詰め込みすぎたとちよつと後悔したけれど、足りないよりはマシ！ と自分に言い聞かせる。

爆発は国と国を隔てるためのゲートで起きたらしい。現場に近づくと焦げた臭いが漂い、人の叫び声が聞こえ始めた。

嫌な予感がして、心臓がバクバクとうるさくなる。

あそこだ。半壊したゲートが見えてきた。

「うわあ……」

想像していたよりも酷い光景だつた。

積み上がる瓦礫がれきの山。血を流して苦しんでいるたくさんの人。

家族が生き埋めになつてしまつて、必死に瓦礫をどかしている人がいる。

両親と離れ離れになつて泣き叫んでいる子どもがいる。

まるで地獄を見ているようだ。

わけもわからず怖くなつて、足が震える。

ここまで来て怯えちゃ駄目。私が来たのはみんなを助けるためなんだから。

「おい、やめとけ！」

「ひゃああつ、すみません！」

突然聞こえてきた怒鳴り声にびっくりして、反射的に謝つてしまった。

「アル！ その声は私に対してのものではなかつた。」

大きな男の人が誰かを止めている。

「やめません！ みなさんが苦しんでいるのですよ!？」

栗色の髪のお兄さんが叫びながら、細い手で瓦礫を一生懸命どかしていた。けれど、体力を使いすぎたのか、フラフラになつている。

「薬も薬を作るための薬草もないなら、僕はただの役立たずです。ですから、せめてこれくらいはしなければ……」

お兄さんの言葉にハツとして、私は慌てて叫んだ。

「薬あります！ 私が持つてきました！」

「……あ？」

お兄さんを止めていた大きな人が、私に近づいてきた。

「……デカいね!? しかもムキムキの体で、顔がすごく怖い！」

身長が二メートル近いマッチョさんのおかげで、この惨状への恐怖が吹き飛んでしまった。

声はがつつり低め。腰に剣を差しているし、もしかしたら山賊……?」

「ただ、この状況に乗じて火事場泥棒をやらかしそうな感じでもなかった。多分、悪い人ではな

い……はず。」

「おい、娘。その鞆かばんに入っているもん、全部薬関係か?」

「は、はい……たくさん持ってきたのでバンバン使ってください!」

「そいつはありがたい話だが……あんたは何者だ?」

「この近くの村で薬師をやっているレイフェルです!」

「……薬師い?」

怖い人の顔がもつと怖くなった。

恐ろしくて固まってしまふ。

「その方は本物の薬師です。ご安心ください」

お兄さんが怖い人にその声をかけた。

「……あ、私、ヤブだつて疑われていたんだ。」

あれ。でも、このお兄さんとは初対面なのに、どうして本物だつて信用されているのだろう。

「おいアル。なんだつて、そんなにはつきり言えんだ」

怖い人も不思議がつてお兄さんに聞いている。

するとお兄さんは、私にほんの少し顔を近づけて、くんくんとおいを嗅いだ。

「この方には薬草のにおいが染みついています。それが、薬師だという立派な証拠ですよ」

「すみません。臭いですよ……」

「いいえ。そんなことはありませんよ。それに、僕も薬師ですから」

私が思わず謝ると、お兄さんは優しい声でそう言ってくれた。

薬師仲間発見。

「僕はアルと申します。隣に居るのはハルバート様。僕たちはアスクラン王国からやって来た者です」

「アスクラン……あのアスクラン王国ですか!」

アスクラン王国とは、海の向こうにある大きな国だ。経済面、軍事面ともに優すぐれていて、『世界で一番豊かな国』とか『死ぬ前に一度訪れたい国』とか言われている。

他国のことに疎とい私でも知っているすごい国。いまいちパツとしないうちの国とは大違いだ。

私が啞然あざんとしてっていると、アルと名乗ったお兄さんにはこやかに話し続ける。

「実は僕は『蛇へびの集つどい』の人間でして。今回はその関係でこの国を訪れていました」

「『蛇の集こ』……ですか?」

私が首をかしげると、アルさんが不思議そうに尋ねる。

「……ご存じではありませんか?」

「す、すみません……」

「いえ。そんな大したものではありませんので。……ちよと手持ちの薬を切らしている時に、事故に遭遇してしまったのです。あなたが来てくださったって助かりました」

そう言って笑うアルさんは、土埃や煤で全身が汚れていた。掌も傷だらけで血が出ている。爪も割れている。物凄く痛そうだ。私だったらこんなふうに笑ってられない。

「鞆の中身を見せてもらってもいいですか？」

「は、はい、どうぞ」

アルさんに言われて鞆を地面に下ろすと、ドシャツと重量感のある音がした。

「こんなもん背負って走ってきたのか……」

ハルバートさんは、若干引いているようだ。

アルさんは真剣な表情で、私を取り出した傷薬や痛み止めを眺めている。

「こんなにあたくさん……全部使っていいのですか？」

「そのために持つてきましたから！」

「……ではありがたく使わせていただきますね」

「あ、ちよと待つてください」

薬を手にとろうとするアルさんを止める。

「あなたは手当てを受ける側です」

そんなに傷だらけの手、放っておけないし。

「申し訳ありません……せつかく薬が届いたのに……」

「いえいえ、アルさんはさつき頑張っていたじゃないですか」

本当は一緒に怪我人の手当てを薬師のアルさんとしたほうがスムーズに進むのだろうけれど、これ以上無茶はさせられない。

アルさんの手当てを終わらせて、とりあえず一安心。

そして、私は他の人の手当てを始める。

アルさんはやっぱりじつとしていられたかたみたいで、私の手伝いをしようとしてくれた。

だけど、ハルバートさんに止められていた。「親父殿に言いつけんぞ」とか、そんなことを言われていたような。

あの二人はどんな関係なのだろう。

「……はい！ これでもう大丈夫ですよ」

怪我をしたおじさんの脚を消毒液で綺麗にしてから、患部に傷薬を塗って包帯を巻く。応急手当の方法を勉強しておいてよかった。最初は、包帯を巻くことがすぐ下手だったんだよね。

「ありがとうございます、薬師様。助かりました」

おじさんが嬉しそうにお礼を言ってくれた。

やっぱりこういう時、人を助ける職業に就いていてよかったと思っ。

けれど喜びを噛みしめている場合じゃない。怪我人はまだまだいるんだから。

次の人……と思つてゐると。

「あの……傷口を洗うのであれば、消毒液ではなくただの水を使ったほうがいいかもしれません」
アルさんが、消毒液の小瓶こびんをじーっと見ながら言った。

確かに傷口を清潔にするなら、消毒液より水が適している。

消毒液には殺菌作用があつて、ばい菌だけじゃなく体の中にあるいい菌まで殺してしまうからだ。そのことをちゃんと知つてゐるアルさんは、薬師としてしっかり勉強してきたのだろう。

アーロン様が雇つてゐた薬師の中には、水を使うのは原始的！ と頑かたくなに主張を続けていた人もいた。

私も消毒液派だけだね。……ただ、これは普通の消毒液とは違うのです！

「この消毒液は、人体の常在菌には無害の成分で作つたものなんです。ですから、いくらバシヤバシヤ掛けちゃつても大丈夫ですよ」

「常在菌を殺さない……？ な、なるほど、これがあの『夢の消毒液』……」

アルさんが小瓶こびんへ感動の眼差まなざしを送つてゐる。

夢の消毒液。それはアーロン様の薬屋が初めて開発した、傷口の洗浄に特化した消毒液のことだ。

……ちなみにレシピの生みの親は私。アーロン様は、それを自分たちの薬師の功績にしてしまつた。

今この国では、このレシピで作つた消毒液が広まりつつある。

私が精製した消毒液を見て『薬草伯爵様のところの消毒液かのう？』と村長さんが聞いてきたく

らいだし。薬草伯爵つていうのは、もちろんアーロン様のあだ名だ。

この消毒液は作り方にコツ、みたいなものがある。それを見極めるのは私にしかできない。

それもあつて、私が調合に携たずわらないなら販売しないでつて言つただけれど、ガンガン流通してゐた。しかも他の薬師にレシピを提供してゐるらしい。ええ……

販売に関する契約書みたいなものを作つておくべきだったと後悔しても、時既に遅し。

まあ、コツについては、以前アーロン様や薬師たちに説明してゐる。だから、ちゃんと作れるようになったら、好きに販売してもいいと思うけどさ。

まさか、コツが掴つかめないまま作つて、販売なんてしてないよね？ してないよね!?

「……大丈夫ですか？」

ぐるぐる考えごとをしていると、心配そうにアルさんに声をかけられた。

いけない、いけない。今は目の前のことに集中しないと。

そう思つてゐた時だ。

「何してんだテメエ!!」

突然、ハルバートさんが怒鳴どなり声を上げた。その巨体を活かして瓦礫がれきをどかさ作業をしていたはずだけど、何があつたのだろう。

アルさんと顔を見合せて様子を見に行つてみる。

「ハ、ハルバート様!? 何をしていらつしやるのですか!？」

アルさんが驚愕きやうがくの声を発した。

私も目の前の光景にぎよつとする。

ハルバートさんが悪鬼のような形相で、ちよび髭のおじさんの頭を鷲掴みにしていたのだ。しかも、ちよび髭さんの足は地面から離れていた。浮いてる、浮いてる！

端から見れば、ハルバートさんはちよび髭さんをカツアゲしている山賊だ。だけど他の人たちも、怖い顔をしてちよび髭さんを睨みつけていた。

「この野郎、自分のせいで事故が起こったつてのによ……！」

「わ、悪かった。ワシが悪かった！ だから許してくれえ……！」

「だったら、テメエが持つてるモンは全部使わせてもらうぞ？ いいな？」

「どうぞどうぞ！」

ハルバートさんに凄まれ、ちよび髭さんが半泣きでそう叫ぶ。

爆発した馬車を所有していた商人が、あのちよび髭さんだったらしい。アルさんにこっそり教えてもらった。

ハルバートさんは商人の頭をパツと離すと、近くに停まっていた馬車に向かう。

その馬車の荷台は真つ黒な布で覆われていた。

ハルバートさんがその布を捲ると、その場がざわつく。

「え、ええええええ！」

私もびっくりして大声を出してしまった。

荷台にあったのは医療品一式だった。どれも新品。荷台いっぱい積んであるから、かなりの

量だ。

「こ、これはどういうことですか？」

アルさんが困惑した様子で商人に尋ねる。

私も聞きたい。手当てをするための薬や道具がなくて、救護兵も到着が遅くなるつて話だったはず。だから、こうして私が来たんですが？！

気まずそうに俯いている商人の代わりに、ハルバートさんが説明する。

「こいつはもう一台馬車を持つてたんだよ。それに積んでいたのがこれだ。けど、こうやって隠していやがった」

「あ、当たり前じゃないか！ これは向こうの国への輸出品だぞ。非常事態とはいえ、取引相手に許可を取っていないのに使うわけにはいかないだろお？」

商人が嫌味っぽい物言いで反論する。

「でも、自分の傷の手当てをするのに使つてたわよね？」

そばにいた女の人が、そう言う。すると、商人はしまったという顔をした。

「す、少しくらいならいいかなと思つて……！」

「あ？」

「しゅ、しゅみましえん……！」

ハルバートさん怖いです。ちよび髭商人は顔面蒼白で、その場に座り込んでしまった。でも、全然可哀想だとは思わない。むしろ一発殴つてやりたい。

これだけの医療品いりょうひんがあれば、私が急いで薬を持つてくる必要はなかった。明日、筋肉痛になることは確定だろう。その責任を取ってほしい。

人々も怒ったり呆れたりしながら、荷台から薬を取ろうとする。

「み、みなさん、待ってください！」

「……アルさん？」

突然アルさんが、みんなを止める。

私が首をかき上げていると、アルさんは医療品いりょうひん一式を眺めながら告げた。

「そちらの荷台にあるものではなく、この薬師様いしやうが持つてきてくださった薬を使用してください」

「アル？ そりゃ、嬢ちゃんぢやうちゃんが重い荷物をここまで運んできたから、使つてやらねえと申し訳ないと思うが……」

「えっと、それだけではないのですが……でも、お願いします」

アルさんはハルバートさんに曖昧あいまいに答えたあと、みんなに頭を下げる。

私としては、帰りの荷物が減るからありがたい。けれど、アルさんには何か思惑おもひわくでもあるのかな。

「貴様きさまあ！ 私の用意した薬がその女が作った薬より劣せうつているとでも……」

商人が顔を真っ赤にしてアルさんに詰め寄ろうとする。けれど、またハルバートさんに頭を鷲掴じゆつかみにされて、どこかへ連行されていった。

「すみません、あなたの了承を得ないまま言ってしまった」

邪魔者がいなくなったところで、アルさんが私に深く頭を下げた。

そんなに謝らなくてもいいのに。私は首を横に振る。

「私の薬を必要としてくれてありがとうございます」

やっぱり同じ薬師いしやうから自分の薬を認められるっていうのは、すごく嬉しい。こんな状況なのについつい笑顔になってしまう。

「あ……い、いえ……僕のほうこそありがとうございます……」

アルさんは顔を赤くしながらお礼を言う。手の怪我のせいで熱が出たのかな？

それから数時間後。救護兵の方々がやって来たころには、怪我人の手当てはほぼ終わっていた。

比較的軽傷の人たちが手当てを手伝ってくれたり、瓦礫がれきの中に埋まっていた人たちを助けてくれたりしたおかげだ。

アルさんも、手が使えない代わりに薬の塗り方や包帯の巻き方をみんなに教えて回ってくれたのも大きい。

「……あれ？」

そういえば、アルさんとハルバートさんの姿が見当たらない。さつきまで、一段落したからって休憩していたのにな。

「そういえばあの人もいない……」

ハルバートさんに連行された商人も見当たらない。

まさか、二人と一緒にどこかへ？ と疑っていると、その商人は木に縛られて、身動きが取れな

い状態で発見された。

暴行を受けた様子はないけれど、さつきとは何かが違う。特に顔の下半分が……

「あつ、髭がないっ！」

ちよび髭が一本残らずなくなっている！

自分のトレードマークを失った商人は、青ざめて震えていた。

「あ、あの男、私の髭を剣で全て切り落としてしまった……」

それはすごい神業。目の前で剣を振るわれたのだから、そりや怖かったよね。

でも、ちよび髭がないほうがかっこよく見えるのでは？ イメチェンイメチェン。

「くそお……その小娘が作った薬が、あの店の薬よりもいいものだなんて、私は信じないぞお……」

悔しげな声で呻くように言う商人。

これから彼には厳しい取り調べと処罰が待っているだろう。故意ではなかったとはいえ、こんな大事故を起こしてしまったのだ。二度と商人として仕事はできないに違いない。

可哀想だけど仕方ないね。

救護兵に「馬車で送っていきます」と言われたけれど、忙しいだろうから断る。

そして私は空になった鞆を持って、村に帰ってきた。

村に入つてすぐ、村長さんが出迎えてくれる。

「お。戻ったか、レイフェルさん」

「ただいま帰りました」

「ちよびよよかったわい。レイフェルさんに用があるとかで、村の外からのお客さんが来とるぞ」

「外!？」

ギヤツ。もしかしたら実家からの追っ手なのでは。

「山賊みたいな大男とひよる長いお兄さんじゃ」

村長さんのその言葉に、私は目を丸くした。

「お邪魔してるぜ、嬢ちゃん」

急いで薬屋に戻ると、そこには笑顔のハルバートさんがいた。

その手には鋭い切れ味を持つ剣……ではなく、箒と塵取りが握られている。

「レイフェルちゃんを待っている間、暇だから何かやることはないかって言われてねえ」

店番をお願いしていたおばあさんが、笑いながら朗らかに言う。

だからって、店内の掃除を頼んじゃ駄目だよ！ と言いたいけれど、ハルバートさんは楽しそう

に床を掃いているから、まあいいか……

「ハルバートさん、お掃除ありがとうございます」

「気にすんな。俺は、掃除が趣味なもんでな。部屋が綺麗になると、心もすっきり綺麗になるもんだぜ」

「それすぐわかります……!」

工作上、整理整頓は心掛けていなければならないけれど、綺麗に片付けたあとだと作業がいつもより捗るんだ



よね。

同志との出会いに拳を握りしめて喜んでいると、ぶつぶつ呟いている怪しい人物を発見。

……アルさんだ。

うちの薬をじーっと見たりにおいを嗅いだりしている。私が近づいても気づく気配がない。すぐい集中力だ。

「アル、嬢ちゃんが帰ってきたぞ！」

見兼ねたハルバートさんが、大きな声でアルさんと呼んだ。アルさんの細い肩がびくつと跳ね上がる。

「す、すみません、ハルバート様……つてああああ、おかえりなさい……ええと、レイフェル様！」私に気づいた途端、アルさんは顔を赤くしたり青くしたりと忙しい。

というより、どうして私の店がこの村にあるってわかったのかな。

不思議に思っていると、私の疑問を察してくれたハルバートさんが説明してくれた。

「嬢ちゃんが走ってきた方向にあるのは、この村くらいだからな。この村長さんに、優秀な薬師がいるか聞いてみたら、ビンゴだ！」

「優秀だなんてそんな……」

「いえ、あなたの薬は素晴らしいものです。あの商人が持っていた薬とあなたの薬……それぞれのおいを嗅いだ時、どちらが素晴らしいものかすぐにわかりました」

アルさんが興奮気味に言葉を被せてきた。に、におい？

よくわからずにいる私に、アルさんは柔和な表情で続ける。

「ですから、こうしてあなたの薬を全種類買いにきました」

「全種類い!？」

「えっと、駄目でしょうか？」

「そんなことはありませんけれど」

薬師が他の薬師の薬を買うつていうのも変な話だけれど、禁止されているわけではない。だけれど……これは私の勘なんだけれど、アルさんは多分、私よりすごい薬師様だ。

そんな人がどうして私の薬を欲しがるのか、気になるといえば気になる。

するとアルさんはニコニコしながら、こんなことを言い出した。

「実は僕、薬コレクターでもありまして。他国の薬をこうやって買い集めているのです」

「薬コレクター……」

「はい！ 薬のにおいに囲まれているのが一番の至福の時なんです！」

か、変わつてるなあ〜！

そう思っていると、ハルバートさんが呆れた様子で口を開いた。

「アルは『蛇の集い』いちの薬好きだからな」

あ、そういえば『蛇の集い』ってなんの集まりなのかな。

『蛇の集い』について詳しく聞きたいんですけど……」

「ああ、アスクラン薬師協会のことです」

アルさんがにこやかに教えてくれた。

「そ、そうなんですか」

私はこくこくと頷く。

うちの国にも薬師連盟というのはあるけれど、アスクラン王国ではそんなかつこいい呼び名があるんだ……

私って今までずっと薬のことばかり考えていたから、他の国のこと、全然詳しくないんだよね。あの国の王様がどうか話題を振られても「？」だし。新聞を読んでも、いまいち興味が持てなくて。もう大人なのに情けない……

あ、でも『蛇の集い』の名前の由来はなんとなくわかる。

私たち薬師は薬神様っていう薬の神様を信仰しているのだけれど、蛇はその薬神様のペットなんだよ。

「こいつ、薬学王子なんてあだ名がついているんだぜ」

ハルバートさんがニヤニヤしながら言うと、アルさんは困った笑みを浮かべた。

「僕には分不相応なあだ名だと思いますが」

「でも、なんか、『薬のことならアルさんにお任せ！』って感じがして格好いいと思います！」

私がそう言うと、アルさんは顔を赤くしてしまった。褒められることに慣れていないのかな？

そう思いつつ、私はハルバートさんに向き直る。

「ハルバートさんも『蛇の集い』の人なんですか？」

「俺が薬師に見えるか？」

「見えませんね〜」

私が即答すると、ハルバートさんは腰に差している剣の鞘を軽く叩いて笑った。

「俺はアルの叔父だよ。それで護衛みてえなもんをやってる」

癒し系のアルさんと、ムキムキマンのハルバートさんが親戚……意外だ。

「俺の剣はなかなかのもんでな。アスクラン王国じゃ『剣聖』って言われてるんだぜ？」

確かに、あのちよび髭商人の髭だけ綺麗に斬ったんだもんね。相当な腕前だろう。

「あの、そんなお二人がなんでうちの国に……？」

私が気になっていることを聞くと、アルさんがその理由を話し始めた。

『蛇の集い』はアスクランだけではなく、他国の薬師も勧誘しているのです。今回この国を訪れたのは、葉草伯爵……レオル伯アロン様と会うためです。彼の薬屋が開発した薬は優れた効能を発揮していますから。新たな会員の最有力候補なのです！」

「うぐう……」

思わず呻いてしまった。

そんな私の顔を、アルさんが心配そうに覗き込む。

「レイフェル様？ どうかなさいましたか？」

「いえ、大丈夫なのでお気になさらず……」

平常心、平常心。自分にそう言い聞かせる。

すると、ハルバートさんがアルさんに声をかけた。

「そろそろ時間だぞ」

「そうですね。そろそろ行きましょうか。……レイフェル様。このご恩はいつか必ずお返ししたいと思います」

ます」

「そ、そんな、いいですよー！」

「そう、ですか……」

アルさんが悲しそうな顔をしてしまった。そ、そんな表情をさせるつもりでは。

彼の背後ではハルバートさんも困った顔をしている。

ここは私が折れるべきか。

「では、お礼、楽しみにお待ちしておりますね」

「はいー！」

アルさんは笑顔で頷いてくれた。ほっ。



「わたくし、あの方が着けていたペンダントが欲しいのですけれど……ねえ、アロン様あ」

私——アロンに、ルージェは甘えた声を出した。

ルージェが言っているのは、先ほど私の屋敷を訪れたノートレイ伯爵の妻、カテリーナ夫人のペ

立ち読みサンプル
はここまで

ンダントのことだろう。

黄金のチェーンで繋がれた、青い海を彷彿とさせる大粒のサファイア。その周りにちりばめられた美しい輝きを放つダイヤモンドと、神秘的な光沢を持つホワイトパール。

宝石に関しては疎い私でも見事だと思うほどの、素晴らしい意匠だった。

なんでも、ノートレイ伯爵の夫人となった女性が代々身につける特別なものだそう。ノートレイ伯爵が自慢げに語っていた。

どれだけ金を積んでも、決して譲ってくれないだろう。それはペンダントの説明を聞いていたルージェも理解しているはずなのだが、ノートレイ伯爵と夫人が帰ると、すぐに私に強請ってきたのだ。

その姿はミルクを強請る仔猫のようで可愛らしいが、彼女が求めるものは可愛いとは到底言い難い。

「ルージェ、君の気持ちはよくわかるよ。確かに、夫人よりも君が身につけていたほうが、ペンダントも喜ぶと思う」

「本当ですか？ でしたら……」

ルージェの表情がぱあつと明るくなるが、こればかりは駄目だ。私は心を鬼にして最愛の婚約者に告げた。

「あのペンダントはノートレイ伯爵夫人の証のようなものだ。お金で手に入れられるものではないんだよ」

「えー！ そ、そんなあ……」

ルージェは目を潤ませ、俯いてしまう。

「わたくし、とつても辛いですわ……あんなに綺麗なサファイアを見せられたら、欲しくて欲しくてたまらなくなってしまう。わたくしだけじゃなくて、誰だつて欲しいって思いますわあ……」

「ああ、確かにそうだろうね。私もあのペンダントの美しさから、しばらく目を逸らすことができなかつた」

これ以上ルージェが悲しむ顔を見たくなくて、彼女に話を合わせる。ただ、ペンダントに見惚れていたのは本当だ。

先ほど本人にも言ったように、夫人ではなくルージェの胸元で輝くべきだとも思った。美しい装飾品は、美しい者が身につけるべきじゃないか。

少なくともカテリーナ夫人は、ペンダントの持ち主に相応しくない。

あんなに丸々と肥えた豚一歩手前の中年女なんて、どれだけ着飾っても変わらないだろう。むしろ宝石の美しさを損ねている。

私がそう考えていると、ルージェは頬を膨らませる。

「もう！ なんなのでしょう、あの夫人！ わたくしが悔しがるとわかっていて、わざとペンダントを着けてきたに決まっています！」

「言われてみれば……！」

ルージェの言葉に私は深く頷いた。